

■ピースおおさか（大阪国際平和センター）

第2次世界大戦の頃、現在の大阪城公園は軍事施設が多数あったため、大阪空襲では標的にされた場所であった。その地に、平和を願い戦争の歴史を語り学ぶ施設として、1991年（平成3）に「ピースおおさか」は開館した。



同館は常設展示と特別展、さらに講演会など、さまざまなイベントや豊富な図書と映像資料などを通じて、戦争の悲惨さと平和の大切さについて理解を深める情報を発信している。

2階の展示室は、約1万5,000人が犠牲となった大阪空襲を中心とした戦争の実相を伝える展示をしている。約50回に及んだ大阪空襲のあとを再現した模型や原寸大の1トン爆弾の模型からは強い悲しみを受けてしまう。「大阪戦災傷害者・遺族の会」が調査した名簿をもとに大阪空襲による死没者の本格的調査を全国的に行い、判明した約9,000名の氏名を「大阪空襲死没者名簿」として保管している。

2005年（平成17）、大阪空襲で亡くなられた方々を追悼し、平和を祈念するモニュメント、「刻^{とき}の庭」を整備。死没者の名簿を収納し、その名を刻んだ銘板が置かれている。2024年3月31日時点で「大阪空襲死亡者名簿」には、9,157人の名前が搭載されている。また、「音の出るオブジェ」は、大阪が8回の大空襲を受けたことにちなみ、8個の鐘が配置されている。
（『中央区史跡文化事典』を元に修正・追加）

■桜門

本丸への正面入り口が「桜門」、桜門に向かう左右の堀は水がない「空堀」になっている。上町台地の最先端で高く、豊臣時代、徳川時代ともこの部分は空堀であった。桜門の両脇に「竜虎石」があり、右側が竜石、左が虎石。雨が降るとそれぞれの石の表面に竜と虎の姿が浮き出るといふ伝説が伝わっている。桜門



（国重文）は明治20（1887）に陸軍が再建したものである。

桜門を入った枳形の中で一番大きな石が「蛸石^{たこいし}」である。大阪城内最大の巨石である。左の端に蛸のような形が見られる。石の中の鉄分がにじみ出て、自然にこのような形になった。（『大阪城ふしぎ発見ウォーク』）

■大阪城天守閣

昭和のはじめ、大阪の象徴ともいふべき大阪城の開放と公園化を図ろうとする市民運動が展開された。天守閣の復興もその事業の一つで、昭和5年に着工し昭和6年（1931）に完成をみた。

外観は俗に黒田屏風と呼ばれる「大阪夏の陣図屏風」に描かれた秀吉創建の天守閣の姿を参考に、寛文5年（1665）の落雷で天守閣の焼失後、そのままになっていた天守台上に復元したものである。

鉄筋コンクリート造り外部5層、内部8階の構造で、高さが54.8mあり、エレベータで最上階の展望台に上ることができる。内部は秀吉と大坂城を中心テーマとした郷土歴史博物館として活用され、全国有数の秀吉関係や城郭関係資料の常設展示のほか、春秋には特別展が開かれている。

（『大阪市の文化財』大阪市文化財協会 1997）



2013.10 撮影

■旧陸軍第四師団司令部庁舎

天守閣復興のための市民からの寄付金150万円のうち80万円をあてて建設され、1931年（昭和6）の竣工後すぐに軍に献納された。軍事施設として、ドイツの古城を模した地下1階地上3階（中央部分は4階）の重厚な建物で、はじめは第四師団司令部庁舎に、その後、中部軍管区司令部庁舎となった。その際一部は、現在の豊国神社付近に移った。

戦後は占領軍の施設にあてられ、立ち入りが禁止された。後に、大阪市に移管され、大阪市警察（のちの大阪府警察）本部庁舎として使用されたことがあるが、1960年（昭和35）から2001年（平成13）まで、大阪市立博物館として使用されていた。

（「大阪城周辺に残る戦争の傷あと」ピースおおさか 2005）

■金蔵

全国の城郭の中でもたいへん珍しい江戸時代の金蔵である。大変重厚な造りで、入り口が三重になっている。三回扉を開けないと中に入れない。その鍵がまた、慣れないと簡単に開けることができない。入り口の扉だけでなく、地下からも侵入できないように床下には、全部石が敷き詰められ、石と石の間には漆喰を入



れて固めてある。窓も小さく塗篋戸^{ぬりごめと}で鉄格子をはめ込んでいる。長崎貿易での収益金や西日本にある幕府直轄領の年貢金など、ばく大な幕府の公用金がこの金蔵に蓄えられていた。（『大阪城ふしぎ発見ウォーク』）

■山里丸石垣の機銃掃射痕

石垣の表面に残る傷は、第二次世界末期の空襲による被害の痕跡で、機銃掃射によってついたものと推定される。昭和20年（1945）3月から終戦前日の8月14日まで、大阪は8度におよぶ大空襲を受け、陸軍の中枢機関や軍事工場があった大阪城も標的となった。

山里丸でもこのほかにも爆弾によって南側石垣上部が吹き飛ばされ、北側内堀に面した石垣も数か所ひずんだが、現在はいずれも修復されている。

（説明板より）



■刻印石広場

大阪城内の石垣で、傷みが激しく剥落する危険性のあるものは、もとの石材と同じ産地から同じ形に切った新しい石と取り換えて修理を施している。取り外した元の石は、これも貴重な文化財であるから大阪城内の一角に保存している。それらの石の中で刻印のあるものを集め、大阪城の石垣に刻まれた刻印について理解を深めていただくというのがこの場所である。それぞれどの藩のものかが分かるように解説もついている。

（『大阪城ふしぎ発見ウォーク』）

■極楽橋

この橋のたもとは本来山里門があり、多聞櫓も建てられて枳形になっていた。しかし、門も多聞櫓も明治維新で焼失した。極楽橋も同じように維新の際には焼失してしまったが、1965年（昭和40）に鉄筋コンクリート製で再建された。

なぜ、極楽橋というかということ、かつては本丸の位置に大坂（石山）本願寺の御堂があったためと考えられる。阿弥陀さんのおられる本願寺の御堂、すなわち極楽往生へ向かう橋として極楽橋と名付けられたと考えられる。その名前が豊臣大坂城でも徳川大坂城でもずっと引き継がれて今日まできた。（『大阪城ふしぎ発見ウォーク』）

■中国製狛犬

この一對の「こま犬」は中国・明の時代の文化遺産でそれぞれの高さ約3メートル、重さ約2.9トンある。日中戦争の最中に日本へ運ばれ、当時陸軍第四師団司令部のあった大阪城内に置かれた。戦後も長らく山里口出柙形の東付近に置かれていたが、1984年（昭和59）、中国政府により改めて大阪市に寄贈されることとなり、現在の場所に移された。

以来この「こま犬」は両国人民の友好関係を促進し、友誼を深める象徴となっている。脇に建立された記念碑は変わらぬ日中友好への願いを表した「中日友好 萬古長青」の文字が刻まれており、これは当時の宋之光中華人民共和国駐日本国特命全権大使の筆になる。（説明板より）

■旧砲兵工廠化学分析場

1919年（大正8）、寝屋川にかかる京橋の南側に建てられた左右対称のネオ・ルネッサンス風赤レンガ2階建の重厚な建物で、建築家の置塩章（おしお あきら）氏の設計による。延面積1,887㎡。新兵器の開発や研究、化学試験などがここで行われていた。戦後すぐは大阪大学工学部校舎、1964年（昭和39）以降は自衛隊大阪地方連絡部庁舎として使用されていた。通りに面した西側には石造りの



2024.11.23 撮影

の小さなアーチ門が今でも残っている。大川から荷揚げした物品を運んだトロッキのレールがこの門をくぐって場内に通じていた。

（「大阪城周辺に残る戦争の傷あと」）

■砲兵工廠跡碑

1870年（明治3）、大阪城三の丸米倉跡に官営の軍需工場「造兵司」が設置された。「大阪造兵司」「大砲製造所」「砲兵第二方面砲兵支廠」とその名称を何度も変えたが、1879年（明治12）に「大阪砲兵工廠」と改称し、以後、一般にこの名称で呼ばれるようになった。一貫して陸軍直営の兵器工場として、大砲、砲弾など重量兵器を製造した。戦争末期には、海運器材、航空機部品等の比率が増加し、そのほか、ロケット砲、風船爆弾、毒ガス弾の弾体、特攻兵器、簡易兵器なども生産した。

1959年（昭和34）に砲兵工廠出身者の親睦団体が建立した記念碑。建立当時は本館の建物が残っていたが、1981年（昭和56）、大阪城ホール建設のため解体された。

（「大阪城周辺に残る戦争の傷あと」ピースおおさか 他）

■京橋駅爆撃被災者慰霊碑

終戦前日の1945年（昭和20）8月14日、B29（145機）が大阪砲兵工廠に集中爆撃を加え、706トンの爆弾を投下したが、そのとき、流れ弾1トン爆弾4発が京橋駅にも落ちた。そのうちの1発は、多数の乗客が避難していた片町線ホーム下に投下されたため、ホームは一瞬にして生き地獄と化した。名前の分かった犠牲者は230人余り、無縁仏となった人々は500人とも600人ともいわれる。

この慰霊碑は、その地獄のような惨状を目撃して、あまりの悲惨さにショックを受けた大東市の森本栄一郎氏が犠牲者の霊を弔おうと、1947年（昭和22）8月14日に私費で建てたもので、その後、釈迦牟尼仏尊像と納経塔も建立され、毎年8月14日には、遺族と京橋駅など関係者によって、慰霊祭がおこなわれている。

（『大阪の戦争遺跡』一部修正 清風堂書店出版部 1987年）



2024.11.23 撮影